



1. いでよ、土木の大夢想家
2. 月とすっぽん
3. 河川災害と利水ダム

1. 最近の新聞は、エネルギー資源の大規模な輸送計画や大人工島の建設計画などを、たてつけに報道している。「電力連系懇談会」のソ連から容量 600 万 kW の電力を直流送電で供給を受けるという計画、「日ソ経済委員会」の北サハリンから 1500 km のパイプラインで天然ガスを輸入しようという計画、「関西経済同友会」の大阪湾に大阪市全域にほぼ匹敵する大人工島を建設し、100 万人以上もの人口を収容しようという計画などである。どの構想も昭和 50 年代の後半から 60 年代以降の日本の経済発展に対応させようというものである。また、どの計画も財界、政界からかなり強力なバックアップを受けていることも注目される。エコノミック・アニマルという言葉がやや軽蔑の意味をこめて使われているようではあるが、このように貧欲なまでの積極性には感心せざるをえない。実施段階に入れば、これらの計画のどれもが大規模な建設工事を伴うことは明らかである。実際の建設に携さわる土木技術者の役割りは何だろうか？ただ黙々と与えられた仕事を消化してゆくことだろうか？しっかりした技術的背景をもち、長期の見通しに基づいた、雄大な計画を語る大夢想家が土木界からいよいよ、と願う由縁である。 [J]

2. アポロ 11 号が月の石を拾って地球に帰ってきた。わが国では月にうさぎが住むといういい伝えがあり、お隣の中国では西王母から不死の薬を盗んだという仙女嫦娥がいるという。さてどのあたりにいるかは別としてやがて月の世界にも人間のエクメネが広がると、すぐにも土木構築物があることとなり宇宙土木とでもいうような技術が必要となるのではあるまいか。一方、近ごろは陸上の土地が少なくなって人々があふれ出すので、地底に都市をつくり、海底を公園とし、湖や沼の底に余剰米を冷蔵する倉庫がつくられようとしている。さぞかし泥沼のすっぽんどもは驚いていることであろう。地下都市といえどもうすでに大阪や名古屋、あるいは東京八重州口には大きな地下街があり、世界にも珍しい地下景観をつくっている。地上の都市で密なところではおよそ 100 人/ha であるから、1 km 四方に 5 階の地下街をつくとすれば 5 万人の人口を収容できることになり、火災防止と換気に工夫をすれば、快適な住居都市となりうる。また海上都市などちがって暴風雨などの自然災害はもとより、戦争などの社会災害に対してもある程度耐えうることになる。

月を眺めながら土木技術の未来に思いをはせるものである。

[S]

3. 今年も、7号台風、8月前線豪雨、9号台風と相変らずの災害がもたらされたが、これらの河川災害のうち、ダムを有する河川については、ダムによる人工災害であるとの論議がとりざたされている。これは一般にダムとは水を貯めるもの、洪水を調節するものといった概念がしみ込んでいたためと考えられ、ダムの性格が利水、治水と実際はおのおの個々の目的をもっているにもかかわらず、それが地元で理解されていない故であろう。事実治水目的を有しないダムでも、貯水容量の大きなものは、結果として治水効果をあげていることが多いが、これは結果として生じたものであって、利水ダムの場合は本来河川防災の見地からは効果を期待してはならないものである。ところが建設の際の地元説明において、説明不足からあたかも治水目的を有しているかのごとき誤解を地元で与えることがあり、このことからダムができたにもかかわらず相変らず災害がある、ダム操作の失敗ではないか、ダムの水を一度に出したのではないか等の地元の声が生ずることになっていると考えられる。従って、土木工作物のような恒久的な構造物の設置にあたっては、そのものの功罪を細大もろさずPRし、皆が納得のいった上で計画、建設を進めるべきであろう。

[C]